

〔研究資料〕

社会的機能を高める中学校運動部マネジメントの あり方に関する一考察

服 部 宏 治 *
東 川 安 雄 **
迫 俊 道 ***

A Study of Ideal States Concerning Management of Sports Circles in Junior High School for Enhancing Social Function

Koji HATTORI

(Hiroshima International University)

Yasuo HIGASHIKAWA

(Hiroshima University)

Toshimichi SAKO

(Osaka University of Commerce)

Abstract

In this study, we aimed to explore how the activities of junior high school sports clubs today demonstrate social functioning; we divided junior high school sports club activities into scenes with actual bodily movement and other activities (such as meetings and [other] scenes with mingling with fellow club members outside of practice). Regarding research methods, we carried out questionnaire surveys with 936 junior high school students and analyzed 636 who were members of sports clubs. Our analysis identified what makes club activities “fun” and assessed a high level of sports club adjustment in club members who experienced “fun” in both practice and club activities outside of practice.

The results showed that, regarding club activities in junior high schools today, club members with a higher level of adjustment (they found both practice and activities outside of practice to be fun) were in better mental and physical condition and were more stably integrated in their family, school, and local community; as a result, they tended to be more aware of delinquency, even regarding some acts carried out by people of the same generation. Further, many of those highly adjusted club members responded “yes” to questions about the existence of scenes of mingling with fellow club members outside of practice or teaching each other as well as scenes with routine meetings. It can be surmised that the state of club activities outside of classes is one factor in “fun” and heightened awareness of delinquency.

* 広島国際大学

** 広島大学

*** 大阪商業大学

1. はじめに

近年、学校運動部は勝利至上主義による過熱した指導や体罰、顧問教師の身体的精神的負担など様々な問題を抱えながらも学校教育の一環として、また生徒たちのスポーツ環境の「場」として大きな影響を与えてきた。そして、運動部活動はスポーツの楽しさや喜びを味わい、生涯スポーツの実践者としての能力を育てると共に、その教育的効果として自主性や協調性、責任感などの育成を通して人間形成に貢献すると認められてきた。また、青少年を取り巻く状況は、いじめ、不登校、非行といった社会問題を引き起こし、このような状況に対しての予防、軽減対策としての効果も運動部には期待されている。つまり、生徒たちの心身の状態を安定させると同時に学校生活や地域、家庭での生活を安定させ、公正さや規律を尊ぶ力を育てる社会的機能としての期待である。

学校運動部の教育的・社会的効果に関連する先行研究・調査には、植村ら(1994)や郡司ら(2010)、文部科学省調査(2013)などがある。しかし、これらの研究や調査では、中学生に直接非行など問題行動に関する項目を聞いて言及したものではなかった。その中で、荒井ら(1999)の研究では、運動部、文化部を含めた部活動が子ども達の学校生活や地域での生活を安定させ、秩序を維持しようとする意識を強化する機能を発揮し、部活動にうまく適応している者ほど学校生活や自分の住む町に満足感を抱く割合が高く、さらに非行認識のボーダーが高いことなどを明らかにした。また、服部ら(2001)の研究では、スポーツ志向性の高い者(やるのもみるのも好き)ほど心身ともに安定した状態を保つ傾向が高いことなどがわかった。しかし、中学校運動部の部員のみを対象とした分析や、適応度の高い部員のいる部の状況については、明らかにされていなかった。

本研究は、運動部活動に焦点を絞り、中学生にとって普段の学校生活の中で社会的効果を発揮する「場」となっているのかを検証し、また、効果を発揮するための運動部活動のあり方を探ること

を目的とする。つまり、中学校運動部が、部員たちの学校生活や地域での生活を安定させ、秩序を維持しようとする意識を強化し、部員たちと同年代の人たちが行う問題行動に対する予防効果が期待できると捉え、効果を期待できる中学校運動部活動のあり方を具体的に探っていく。

2. 研究方法

(1) 調査方法並びに調査対象者

本調査は、2016年5月より、広島県内の中学校5校に対しアンケートを依頼した。アンケート用紙は、1校当たり250部(1学年80部×3+予備10部)とし、調査方法は各学校に一任した。調査期間は、約1ヶ月とし、7月までに中学校5校より回答があり、有効回答数936人であった。

調査対象者の基本的特性は、以下の表の通りである。

表1 調査対象者の基本的特性(%)

全体	性別		学年		
	男子	女子	中1	中2	中3
930人	50.6	49.4	32.9	32.8	34.2
学内部活動加入率					
運動部加入率	文化部加入率		非加入率		
69.2	23.9		6.9		

また、今回分析対象とする運動部加入者(643人)の内訳は以下のとおりである。性別では、男子58.5%、女子41.5%と若干男子の割合が多くなっている。学年別では、1年生34.4%、2年生33.4%、3年生32.2%であった。

表2 中学校運動部加入者(%)

運動部	性別		学年		
	男子	女子	中1	中2	中3
643人	58.5	41.5	34.4	33.4	32.2

(2) 分析の視点及び方法

分析にあたっては、まず、運動部員たちの所属する部活動へどの程度適応しているか調べた。部活動への適応度については、部の活動を実際の練習場面とそれ以外での部員同士の関わり合い活動(ミーティングや教え合いの場、一緒に食事する場など)に分け、練習の楽しさと練習以外の部員

同士の交流による楽しさに焦点をあてた。つまり、「練習も練習以外の部も楽しい」「練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない」「練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい」「練習も練習以外の部も楽しくない」の4つの選択肢から一つを選び、「練習も練習以外の部も楽しい」と答えた部員の部活動への適応度が高いとして評価した。そして、これら4パターンの適応度の違いと部員自身の心身の状態、学校生活や地域での生活安定度の関連を調べ、また同年代の人たちが行う行為に対する非行認識レベルに違いがあるか分析を行った。さらに、部活動適応度の違いが部員たちの練習以外での交流場面に差があるか調べ、考察を試みた。

分析は、SPSS 統計解析ソフト (ver22) を使用し、クロス集計および χ^2 乗検定により目的に迫った。また、データ量が少ないテーブル等がある場合は正確確率を行った。さらに、必要に応じて、分散分析、多重比較により平均の差が 0.05 で有意を示すもの、サブグループに分類できるものによって、各グループ間の差をみた。

3. 結果と考察

(1) 運動部員の部活動適応度と適応度別心身の状態と生活安定度

1) 運動部所属の部活動適応度

1 日の約 3 分の 1 の時間を費やす学校の中で、部活動に所属している者にとってその活動は肉体的にも精神的にも大きな影響を与えるものと思われる。まず、はじめに学校の運動部に所属している部員たちがどの程度その活動に適応しているか、楽しさをキーワードとして運動部の実際の活動(練習)とそれ以外の活動に分け調べた。表 3 は、その結果である。

表 3 運動部活動の楽しさ (%)

	練習も練習以外の部も楽しい	練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい	練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない	練習も練習以外の部も楽しくない
男子	83.8	9.0	4.1	3.0
女子	78.9	10.5	3.8	6.8

これをみると、運動部所属の約 8 割が「練習も

練習以外の部も楽しい」と答えており、運動部に対する部員の適応度の高さを示している。

2) 適応度別心身の状態

① からだの調子

運動部に所属していると一般的にからだの調子は良く、健康的な生活を送っているものと考えられがちである。表 4 は、運動部所属者のこの 1 年間のからだの調子はどうかを運動部適応度との関連でみている(表 4-1、表 4-2)。「練習も練習以外の部も楽しい」とする部員の「からだの調子のいい」割合(74.8%)は 7 割を超え、また、「練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい」(69.4%)と「練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない」(68.0%)は、「練習も練習以外の部も楽しくない」とする部員(26.7%)に比べ高い割合を示している。また、練習も練習以外の部も楽しくない部員は、他の部員と比べからだの調子の悪い割合が多いといえる。

表 4-1 運動部適応別からだの調子 (%)

	いい	ふつう	わるい
練習も練習以外の部も楽しい	74.8	22.0	3.3
練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい	69.4	25.8	4.8
練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない	68.0	16.0	16.0
練習も練習以外の部も楽しくない	26.7	53.3	20.0

$$\chi^2 = 45.722 \quad p < 0.001$$

表 4-2 運動部適応度とからだの調子

Tukey HSD^{ab}

部活加入	度数	$\alpha = .05$ のサブグループ ^a	
		1	2
練習・練習以外も楽しい	519	1.29	
練習楽しくない練習以外楽しい	62	1.35	
練習楽しい練習意外楽しくない	25	1.43	
練習・練習以外も楽しくない	30		1.93
有意確率		.340	1.000

②友達の受け入れ

表5-1, 5-2は運動部員たちに日頃友達に受け入れられていないと思うことがあるか聞き、運動部適応度との関連を調べたものである。

表5-1 運動部適応度別友達の受け入れ (%)

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
練習も練習以外の部も楽しい	6.4	23.1	38.7	31.8
練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい	8.1	24.2	51.6	16.1
練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない	4.0	12.0	60.0	24.0
練習も練習以外の部も楽しくない	16.7	43.3	26.7	13.3

$$\chi^2 = 24.924 \quad p < 0.01$$

表5-2 運動部適応度別友達の受け入れ

Tukey HSD^{ab}

部活加入	度数	$\alpha = .05$ のサブグループ ^a	
		1	2
練習・練習以外も楽しくない	30	2.37	
練習楽しくない練習以外楽しい	62	2.76	2.76
練習・練習以外も楽しい	519		2.96
練習楽しい練習意外楽しくない	25		3.04
有意確率		.165	.444

統計的には「練習も練習以外の部も楽しくない」と思う部員と「練習も練習以外の部も楽しい」、「練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない」部員の間には差が認められる。運動部の適応度の高い部員は友達とのコミュニケーションにも良好な関係を保っている傾向がみられる。

3) 適応度別生活安定度

①親の理解度

家庭における安定度をみるために親が子どものことをわかっているかと思っているか聞き、運動部適応度別に関連を調べた。

全体的に親の理解度は8割以上（「よくわかってくれる」と「わかってくれる」の合計）と高い。その中で、「練習も練習以外の部も楽しい」部員は、「練習も練習以外の部も楽しくない」部員に比べ、「よくわかってくれる」割合が高く（56.3%）、理解度の高さを示している。運動部適応度の高さと家庭生活の安定度には関連性が認められる。

表6-1 運動部適応度別親の理解 (%)

	よくわかってくれる	わかってくれる	わかってくれない	全くわかってくれない
練習も練習以外の部も楽しい	56.3	35.3	6.9	1.5
練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい	38.7	51.6	9.7	0.0
練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない	48.0	40.0	8.0	4.0
練習も練習以外の部も楽しくない	23.3	60.0	10.0	6.7

$$\chi^2 = 23.441 \quad p < 0.01$$

表6-2 運動部適応度別親の理解

Tukey HSD^{ab}

部活加入	度数	$\alpha = .05$ のサブグループ ^a	
		1	2
練習・練習以外も楽しい	519	1.54	
練習楽しい練習意外楽しくない	25	1.68	1.68
練習楽しくない練習以外楽しい	62	1.71	1.71
練習・練習以外も楽しくない	30		2.00
有意確率		.656	.140

②学校適応度

表7-1, 7-2は運動部の適応度と1日の学校生活の満足度との関連を調べたものである。ここでは、学校生活を授業と授業以外の場面に分け、その満足度を「楽しさ」として聞いている。「授業もわかるし学校も楽しい」を学校適応度が最も高いと判断し、「授業もわからないし、学校も楽しくない」を適応度が最も低いとした。

これをみると、「練習も練習以外の部も楽しい」部員の「授業もわかるし、学校も楽しい」とする割合は7割を超え（71.5%）、学校適応度の高さ

表7-1 部活動適応度と学校生活 (%)

	授業もわかるし学校も楽しい	授業はわからないが学校は楽しい	授業はわかるが学校は楽しくない	授業もわからないし学校も楽しくない
練習も練習以外の部も楽しい	71.5	24.1	3.5	1.0
練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい	46.8	40.3	12.9	0.0
練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない	52.0	24.0	20.0	4.0
練習も練習以外の部も楽しくない	43.3	30.0	20.0	6.7

$$\chi^2 = 53.452 \quad p < 0.001$$

表7-2 部活動適応度と学校生活

Tukey HSD^{ab}

部活加入	度数	$\alpha=.05$ のサブグループ	
		1	2
練習・練習以外も楽しい	519	1.34	
練習楽しくない練習以外楽しい	62	1.66	1.66
練習楽しい練習意外楽しくない	25		1.76
練習・練習以外も楽しくない	30		1.90
有意確率		.088	.302

を示している。また、「練習も練習以外の部も楽しい」部員と「練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない」、「練習も練習以外の部も楽しくない」部員の間には統計的な差がみられ、運動部適応度を高めることは学校生活の適応度を高めることと関連性があると思われる。

③地域適応度

運動部適応度別に自分たちの住んでいる町の好感度を調べ、地域社会への適応度（帰属意識）を明らかにしようとした。

表8-1 運動部適応度別町の好感度（％）

	好き	どちらともいえない	きらい
練習も練習以外の部も楽しい	74.4	22.7	2.9
練習は楽しくないが練習以外の部は楽しい	59.0	36.1	4.9
練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない	44.0	44.0	12.0
練習も練習以外の部も楽しくない	48.3	41.4	10.3

$$\chi^2 = 26.054 \quad p < 0.001$$

表8-2 運動部適応度別町の好感度

Tukey HSD^{ab}

部活加入	度数	$\alpha=.05$ のサブグループ	
		1	2
練習・練習以外も楽しい	515	1.29	
練習楽しくない練習以外楽しい	61	1.46	1.46
練習・練習以外も楽しくない	29		1.62
練習楽しい練習意外楽しくない	25		1.68
有意確率		.438	.225

運動部への適応度と住んでいる町への好感度とは、統計的に関連があり、「練習も練習以外の部も楽しい」とする部員が自分の住んでいる町を好

きとする割合は7割を超え、「練習は楽しいが練習以外の部は楽しくない」「練習も練習以外の部も楽しくない」部員が町を好きとする割合（44.0％，48.3％）を大きく上回っている。このことは、運動部への適応度を高めることと住んでいる町への好感度を高めることには大きな関連があり、町への帰属意識を高めるために所属する運動部への適応度をいかに高めるかを考える必要性がでてくるものと思われる。

以上、運動部員の部活動適応度と適応度別心身の状態ならびに生活安定度との関連性を見てきた。荒井ら（1991）の調査では、運動部・文化部を含めた中学生の部活動加入者全員を対象としていたため、本研究の運動部のみの部活動加入者との経年比較は単純にできないが、今回調査した結果、現代の中学校の運動部は、荒井ら（1991）の分析結果と同様に運動部員たちの生活に影響を与え、生活を安定させ、一定の秩序をもたらす可能性があることが確認された。具体的には、運動部活動の「練習も練習以外の部も楽しい」部員（適応度の高い部員）は、「練習も練習以外の部も楽しくない」部員（適応度の低い部員）に比べ、身体の調子、友達の受け入れ、親の理解、学校への適応度、町の好感度に対して安定的な状態を保っていることが明らかになった。その中で、運動部の活動の楽しさは練習の場だけでなく、練習以外の部の楽しさも学校適応度や町の好感度に関して影響を与えていることが確認された。

（2）運動部適応度別非行認識レベル

次に、同世代が行う22の行為（表9）について、その行動が非行にあたる行為だと思いかを聞き、

表9 同年代の人が行う行為

1.たばこを買う	2.酒を飲む	3.登下校中の買い食い	4.家出	5.いじめ
6.服装違反(制服)	7.金銭の貸し借り	8.授業をさぼる	9.バイクにのる	
10.深夜に街をふらつく	11.友達と喫茶店に行く	12.無断外泊	13.万引き	
14.パーマ・髪を染める	15.化粧	16.金銭の持ち出し	17.暴力	18.セックス
19.スマートフォン	20.カラオケ	21.ゲームセンター	22.シンナー	

運動部適応度の高い部員（「練習も練習以外の部も楽しい」）と低い部員（「練習も練習以外の部も楽しくない」）とで比較してみた。

統計的に差があるのは、「服装違反（制服）」「深夜に街をふらつく」「パーマ・髪を染める」のみであった。もともと「タバコ」や「酒」、「いじめ」「バイク」「万引き」「暴力」「シンナー」などは部の適応度と関係なく非行にあたるという認識は高く、差はみられない。また、「友達と喫茶店に行く」や「スマホ」「カラオケ」「ゲームセンター」は、中学生にとって非行にあたる行為ではなく、日常的な行為となりつつあると思われる。

表10 運動部適応度別非行認識（％）

行動項目	運動部活動 適応度	非行認識度％			χ ² 乗検定
		非行にあたる	非行ではないが よくない	悪くないわ からない	
たばこ	適応度高	94.8	4.1	1.2	N. S
χ ² =1.704	適応度低	89.7	6.9	3.4	
酒	適応度高	92.2	5.6	2.1	N. S
χ ² =0.311	適応度低	89.7	6.9	3.4	
買い食い	適応度高	53.9	27.0	19.1	N. S
χ ² =3.474	適応度低	37.9	31.0	31.0	
家出	適応度高	42.9	31.5	25.6	N. S
χ ² =1.820	適応度低	31.0	34.5	34.5	
いじめ	適応度高	94.8	3.3	1.9	N. S
χ ² =1.587	適応度低	93.1	6.9	0	
服装違反	適応度高	51.6	34.2	14.2	p<0.05
χ ² =6.224	適応度低	44.8	24.1	31	
金銭貸し借り	適応度高	50.9	34.6	14.6	N. S
χ ² =1.273	適応度低	41.4	37.9	20.7	
授業さぼり	適応度高	63.9	24.9	11.3	N. S
χ ² =4.331	適応度低	55.2	20.7	24.1	
バイク	適応度高	88.0	6.8	5.2	N. S
χ ² =5.503	適応度低	86.2	0	13.8	
深夜ふらつき	適応度高	66.0	25.6	8.3	p<0.05
χ ² =8.815	適応度低	48.3	27.6	24.1	
喫茶店	適応度高	19.7	24.4	55.9	N. S
χ ² =1.749	適応度低	20.7	13.8	65.5	
無断外出	適応度高	61.5	23.7	14.8	N. S
χ ² =5.525	適応度低	48.3	20.7	31.0	
万引き	適応度高	97.7	1.7	0.6	N. S
χ ² =0.691	適応度低	100	0	0	
パーマ・髪染	適応度高	71.8	18.4	9.7	p<0.05
χ ² =9.720	適応度低	44.8	34.5	20.7	
化粧	適応度高	41.7	26.4	31.8	N. S
χ ² =0.801	適応度低	44.8	31	24.1	
金銭の持ち出し	適応度高	54.4	23.7	21.9	N. S
χ ² =5.866	適応度低	41.4	17.2	41.4	
暴力	適応度高	88.2	9.7	2.1	N. S
χ ² =0.238	適応度低	86.2	10.3	3.4	
セックス	適応度高	54.1	10.4	35.5	N. S
χ ² =2.059	適応度低	41.4	10.3	48.3	
スマホ	適応度高	11.3	14.4	74.4	N. S
χ ² =2.496	適応度低	20.7	10.3	69.0	
カラオケ	適応度高	21.0	22.3	56.7	N. S
χ ² =3.129	適応度低	31.0	10.3	58.6	
ゲームセンター	適応度高	18.6	20.4	61.0	N. S
χ ² =0.598	適応度低	24.1	17.2	58.6	
シンナー	適応度高	91.8	2.1	6.2	N. S
χ ² =2.702	適応度低	86.2	6.9	6.9	

（3）運動部適応度と部活動環境

適応度の高い部員がいる部活動と適応度の低い部員がいる部活動では、部活動の運営やマネジメントにどのような差があるのか。本研究では、部活動の方向性やリーダーを決めるのと同様に練習以外の部員同士の交流の重要性を想定し、運動部適応度との関連性を調べてみた。質問に設定した「場」及びリーダーの存在、部の目標、部への貢献度、地域との関わりは、以下の通りである。①部員同士で意志決定できる場。②部員同士が教え合う場。③自分の欠点や失敗を話せる場。④部員同士が雑談する場。⑤役職の引き継ぎができる場。⑥練習以外の部員同士の交流の場。⑦食事をする場。⑧全員が発言する場。⑨定期的なミーティングの場。⑩リーダーの存在。⑪部の目標がある。⑫自分自身の部への貢献。⑬地域との関わり。

適応度の高い部員（「練習も練習以外の部も楽しい」）は、高い割合で部の目標が設定されていると答え、リーダーの存在や、自分が部に貢献しているという意識が、適応度の低い部員（「練習

表11 運動部適応度別部活動環境

部活動環境	運動部活動 適応度	選択肢項目（％）				有意差 検定
		ある	少しある	あまりない	全くない	
意思決定の場	適応度高	54.7	33.3	9.7	2.3	※※※
χ ² =87.766	適応度低	24.1	31.0	6.9	37.9	
教えあう場	適応度高	76.4	18.1	4.8	0.6	※※※
χ ² =104.502	適応度低	36.7	30.0	6.7	26.7	
失敗話せる場	適応度高	54.4	29.5	14.1	1.9	※※※
χ ² =93.379	適応度低	30.0	20.0	13.3	36.7	
雑談する場	適応度高	66.8	21.0	9.7	2.5	N. S
χ ² =5.781	適応度低	63.3	20.0	6.7	10.0	
引継ぎの場	適応度高	54.2	30.9	9.7	5.2	※
χ ² =8.184	適応度低	30.0	43.3	13.3	13.3	
交流の場	適応度高	64.1	22.0	9.8	4.1	※※
χ ² =17.679	適応度低	43.3	30.0	6.7	20.0	
食事の場	適応度高	28.0	14.5	24.8	32.7	N. S
χ ² =4.542	適応度低	16.7	23.3	16.7	43.3	
発言の場	適応度高	44.9	27.1	23.0	5.0	※※※
χ ² =73.704	適応度低	16.7	16.7	20.0	46.7	
ミーティングの場	適応度高	51.4	23.4	16.9	8.3	N. S
χ ² =7.495	適応度低	33.3	33.3	13.3	20.0	
リーダーがいる	適応度高	95.2	3.3	0.8	0.8	※※
χ ² =15.194	適応度低	80.0	10.0	3.3	6.7	
目標がある	適応度高	77.5	14.6	5.4	2.5	※※※
χ ² =24.370	適応度低	46.7	20.0	20.0	13.3	
部に貢献	適応度高	40.2	39.4	16.0	4.5	※※※
χ ² =61.668	適応度低	16.7	23.3	20.0	40.0	
地域との関わり	適応度高	24.4	25.3	32.9	17.4	※※
χ ² =12.737	適応度低	13.8	20.7	20.7	44.8	

※ p<0.05 ※※ p<0.01 ※※※ p<0.001

も練習以外の部も楽しくない)に比べ高い傾向がみられる。こういった自己有用感が「楽しい」感情に繋がっていくものと思われる。一方、意志決定の場やお互いが教え合う場、自分の欠点や失敗を話せる場、練習以外の交流の場、発言の場が適応度の高い部員に多く存在しており、このことは練習以外の活動のあり方やマネジメントの仕方が「楽しさ」として重要な要因になっていることを示唆しているといえる。しかし、部員同士で食事をする機会をつくることは、中学生にとってはむしろ難しいのかもしれない。また、差が見られなかった「雑談をする場」は、適応度の高い部員も低い部員も「ある」「少しはある」を合わせると8割以上あり、いずれの部員にとっても重要な時・空間となっていることが伺える。

4. まとめ

青少年を取り巻くスポーツ環境の中で、中学校運動部は生徒たちの身体と心を安定させると同時に家庭や学校生活、地域での生活を安定させ、公正さや規律を尊ぶ力を育てる社会的機能を発揮する「場」として期待されてきた。しかし、単に運動部に入っていれば自動的に身に付くものではなく、社会的機能を効果的に発揮する「場」として機能するための部活動への関わり方やマネジメントの仕方があるものと思われる。

本研究では、現在の中学校運動部が社会的機能を発揮する「場」として機能しているかを検証し、その機能を効果的に発揮するための活動のあり方(マネジメントの仕方)を探ることを目的とした。

結果、現在の中学校運動部において、適応度の高い部員(「練習も練習以外の部も楽しい」)は適応度の低い部員(「練習も練習以外の部も楽しくない」)に比べ、心身の状態や生活の安定度について高い割合を示していたことが確認された。また、一定の行為に対して非行認識レベルが高くなることが確認された。さらに、「楽しさ」に繋がる運動部活動のあり方として、実際の練習以外の部員同士の交流の「場」が重要な意味を持っていることが示唆された。

文献

- 荒井貞光・東川安雄・平松携・小谷寛二・服部宏治・迫俊道(1999), 現代スポーツの社会的機能に関する基礎研究(1), 広島県体育協会スポーツ科学委員会。
- 植村典昭・伊藤正信・野崎武司・西山徹(1994), 中学校運動部活動の教育的効果に関する調査研究, 香川大学教育学部研究報告, 第1部/香川大学教育学部編。
- 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議,(2013), 運動部活動の在り方に関する研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～, 文部科学省, www.mext.go.jp/a_menu/sports/.../05/.../1335529_1.pdf (2017年9月1日参照)。
- 郡司惇史・伊藤裕子(2010), 部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果, 文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 12, 133-140。
- 内閣総理大臣官房広報室(1998), 「青少年の非行等問題行動に関する世論調査」
- 服部宏治・荒井貞光・東川安雄・迫俊道(2001)「中学生のスポーツ志向性と非行認識との関連性」, 広島体育学研究, 27: 35-43。
- 広島県社会教育委員の会議提言(2000), 21世紀初頭に向けた社会教育の振興方策—心豊かな青少年を育む家庭・学校・地域社会の連携の在り方について—, 広島県教育委員会, <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/kyouiku-gakushu-syakyo-index.html> (2017年8月27日参照)。